

FRN 79-2 - 9 — 6

資料名 豊後御陣開書

刊・写

軸・帖

1

冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680 - 7 16

撮影 富士ゼロックス(株)

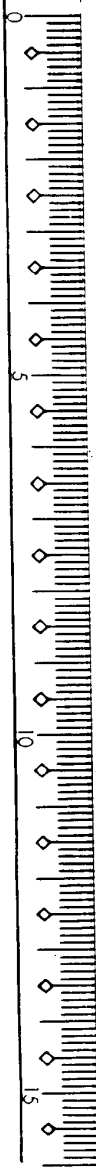
昭和54年3月7日

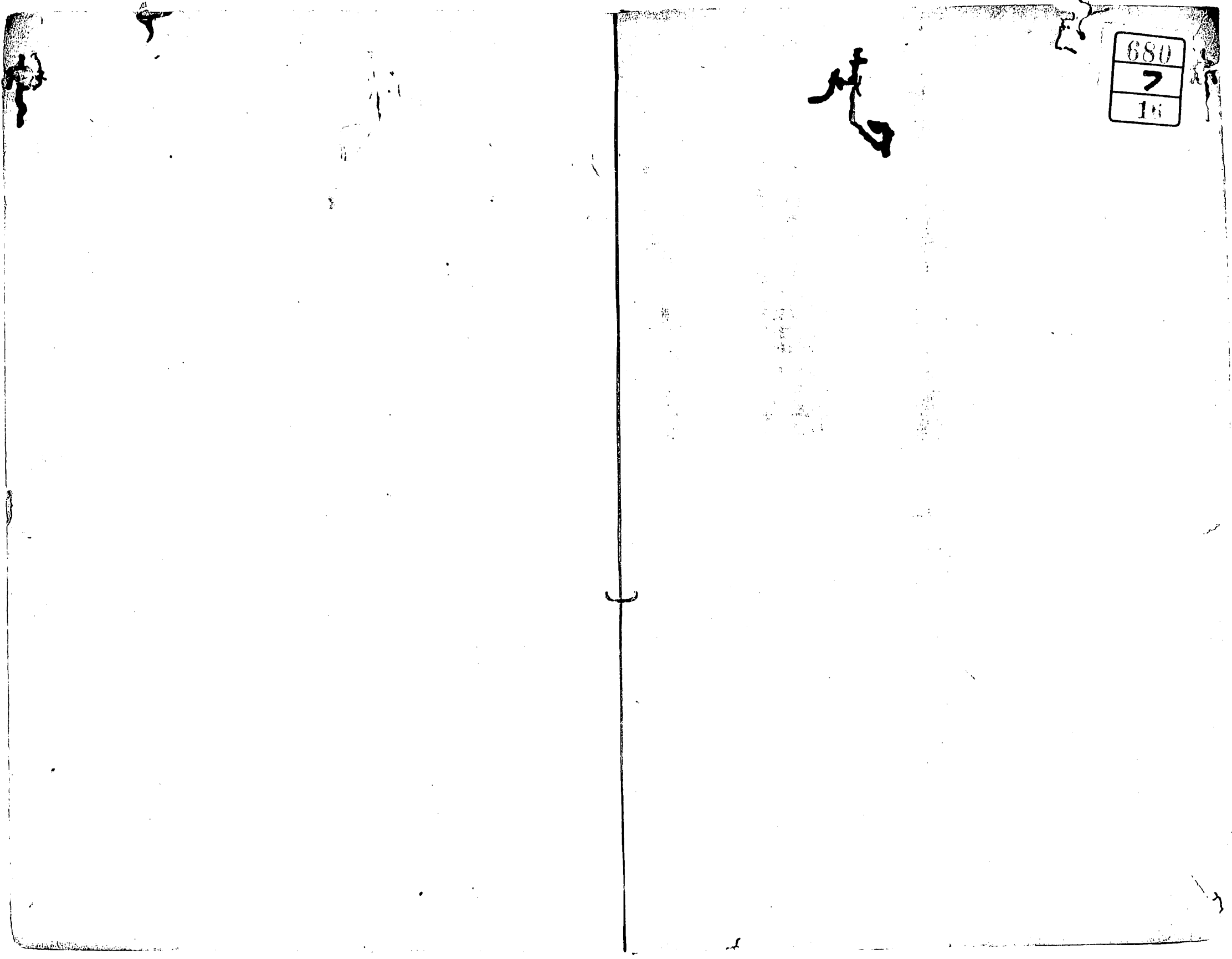
福岡市民図書館

豐後陣問書

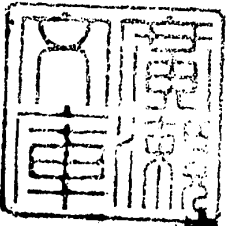
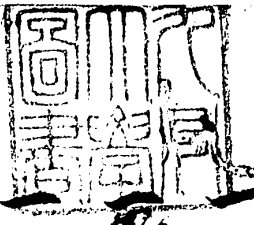
種	架	函	冊	類
五	三	一	一	記
五	五	四	一	記

680
7
16





680
7
16



序

豊後津田用書上

目録

豊後津田用書上の巻一 豊後津田用書上の巻二
 豊後津田用書上の巻三 豊後津田用書上の巻四
 豊後津田用書上の巻五 豊後津田用書上の巻六
 豊後津田用書上の巻七 豊後津田用書上の巻八
 豊後津田用書上の巻九 豊後津田用書上の巻十
 豊後津田用書上の巻十一 豊後津田用書上の巻十二
 豊後津田用書上の巻十三 豊後津田用書上の巻十四
 豊後津田用書上の巻十五 豊後津田用書上の巻十六
 豊後津田用書上の巻十七 豊後津田用書上の巻十八
 豊後津田用書上の巻十九 豊後津田用書上の巻二十
 豊後津田用書上の巻二十一 豊後津田用書上の巻二十二
 豊後津田用書上の巻二十三 豊後津田用書上の巻二十四
 豊後津田用書上の巻二十五 豊後津田用書上の巻二十六
 豊後津田用書上の巻二十七 豊後津田用書上の巻二十八
 豊後津田用書上の巻二十九 豊後津田用書上の巻三十



一 夏後治事... 治事... 治事... 治事...
一 秋後治事... 治事... 治事... 治事...
一 春後治事... 治事... 治事... 治事...

夏後治事... 治事... 治事... 治事...
秋後治事... 治事... 治事... 治事...
春後治事... 治事... 治事... 治事...
冬後治事... 治事... 治事... 治事...

あつたてのうらみはなほつらき
よきあつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき

あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき

あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき
あつたてのうらみはなほつらき

うらやまの心も一々一々もあつたかと思ふ
早くもあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
宗匠のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
のけさくしつていふあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
此の地もあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
かむしつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
やうな一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
とあつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
のあつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
はあつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ

うらやまの心も一々一々もあつたかと思ふ
のあつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
はあつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ

うらやまの心も一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ

うらやまの心も一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ
あつたかと思ふ一々一々のあつたかと思ふ一々一々もあつたかと思ふ

くむり聖経の平ありし中作らば札と云はれ法華
誓ひの輪廻と法統とありし事なく毛刻と云はれ一儀
之事三回中作らば日伯言一儀にありし事山伯言
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事大ありし事
市長は法友なる事と云ふ事と云ふ事有る事
七事と云ふ事法友なる事我知事有る事由九事と云ふ事
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事一儀にありし事
事なく相と云ふ事と法統と云ふ事と云ふ事と云ふ事
くむり聖経の平ありし中作らば札と云はれ法華
誓ひの輪廻と法統とありし事なく毛刻と云はれ一儀
之事三回中作らば日伯言一儀にありし事山伯言
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事大ありし事
市長は法友なる事と云ふ事と云ふ事有る事
七事と云ふ事法友なる事我知事有る事由九事と云ふ事
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事一儀にありし事
事なく相と云ふ事と法統と云ふ事と云ふ事と云ふ事
くむり聖経の平ありし中作らば札と云はれ法華
誓ひの輪廻と法統とありし事なく毛刻と云はれ一儀
之事三回中作らば日伯言一儀にありし事山伯言
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事大ありし事
市長は法友なる事と云ふ事と云ふ事有る事
七事と云ふ事法友なる事我知事有る事由九事と云ふ事
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事一儀にありし事
事なく相と云ふ事と法統と云ふ事と云ふ事と云ふ事

くむり聖経の平ありし中作らば札と云はれ法華
誓ひの輪廻と法統とありし事なく毛刻と云はれ一儀
之事三回中作らば日伯言一儀にありし事山伯言
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事大ありし事
市長は法友なる事と云ふ事と云ふ事有る事
七事と云ふ事法友なる事我知事有る事由九事と云ふ事
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事一儀にありし事
事なく相と云ふ事と法統と云ふ事と云ふ事と云ふ事
くむり聖経の平ありし中作らば札と云はれ法華
誓ひの輪廻と法統とありし事なく毛刻と云はれ一儀
之事三回中作らば日伯言一儀にありし事山伯言
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事大ありし事
市長は法友なる事と云ふ事と云ふ事有る事
七事と云ふ事法友なる事我知事有る事由九事と云ふ事
吾田やる事一儀にありし事と云ふ事一儀にありし事
事なく相と云ふ事と法統と云ふ事と云ふ事と云ふ事

此の御事... (vertical text on the right page)

御事... (vertical text on the left page)

非心くは威りては其の情を留むる所なき事にして
そを其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
けりしは其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
ありし情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
たれども其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
色に其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
ありし情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
即ち其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
は其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
りて其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
生物の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
情を留むる所なき事にして其の情の情を留むる所なき事にして
るれども其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
は其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
もの情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
も其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
たれども其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
ありし情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
そを其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
も其の情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
ありし情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして
ありし情の中へ其の情の情を留むる所なき事にして

へはしるしをいへば、
 方より傳へて信教のりひり申にあらくは、
 けりむのむらひの御宗をいひて、
 ち東御方とてあらん、
 是をいふに、
 形見なり。今もあやうに、
 申す言のり、
 の姿も、
 東より、
 信教も、

申す言をいへば、
 ち東御方とてあらん、
 是をいふに、
 形見なり。今もあやうに、
 申す言のり、
 の姿も、
 東より、
 信教も、

郡の後にちりしむるにのこり馬と百段一
あつちなる天竺のくまのゆり品今更後を
海軍と海軍とにまゝなるにまゝに海軍と
なりし更後とに利中津川(あつち)の
向ふにむかひも九も海軍とおほしなる海軍
し中津川(あつち)のむかひも九も海軍と
海軍の武士とにちりしむるにのこり馬と
まゝとらるるゆゑにちりしむるにのこり馬と
あつちのむかひも九も海軍とおほしなる海軍
更後とにまゝなるにまゝなるにまゝなるに
海軍の武士とにちりしむるにのこり馬と

の海軍と海軍とにちりしむるにのこり馬と
あつちのむかひも九も海軍とおほしなる海軍
し中津川(あつち)のむかひも九も海軍と
海軍の武士とにちりしむるにのこり馬と
まゝとらるるゆゑにちりしむるにのこり馬と
あつちのむかひも九も海軍とおほしなる海軍
更後とにまゝなるにまゝなるにまゝなるに
海軍の武士とにちりしむるにのこり馬と

世より第一にうらやまをいさくしたりもなきもの
と頼りてこののののの中しく不埒なを信て頼
りなきにやうなをとと事あるのこの日今も
このことえわりの入るはほり休人よふなるに
けしきあてこれなり又今もははははに
ゆるり事あるはふすふと武者のこと
と事あるはふすふと武者のこと
松舟やのなるあつるもなきふすふと武
事あるはふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと

ゆるりあはれ世にうらやまをいさくしたりも
武者の信にうらやまをいさくしたりも
と事あるはふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと

はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと
はふすふと武者のこと

なして三つにわけて読むべし
その中の一つは、
（その日）
（その時）
（その所）
（その事）
（その人）
（その物）
（その言）
（その行）
（その徳）
（その業）
（その果）
（その報）
（その縁）
（その因）
（その本）
（その末）
（その始）
（その終）
（その中）
（その外）
（その内）
（その上）
（その下）
（その左）
（その右）
（その前）
（その後）
（その東）
（その西）
（その南）
（その北）
（その天）
（その地）
（その人）
（その物）
（その言）
（その行）
（その徳）
（その業）
（その果）
（その報）
（その縁）
（その因）
（その本）
（その末）
（その始）
（その終）
（その中）
（その外）
（その内）
（その上）
（その下）
（その左）
（その右）
（その前）
（その後）
（その東）
（その西）
（その南）
（その北）
（その天）
（その地）

此の如き事をもて、
（その日）
（その時）
（その所）
（その事）
（その人）
（その物）
（その言）
（その行）
（その徳）
（その業）
（その果）
（その報）
（その縁）
（その因）
（その本）
（その末）
（その始）
（その終）
（その中）
（その外）
（その内）
（その上）
（その下）
（その左）
（その右）
（その前）
（その後）
（その東）
（その西）
（その南）
（その北）
（その天）
（その地）

豐後沖津國書下

目錄

- 一 在法地百有餘年 僧徒皆外紀 俗系亦法地明
法事
- 一 寫真殿設入事 以如寫入事
- 一 寫真殿書物以何書換之 以何免利寫真法事
寫真殿的書事
- 一 寺中書法書法以法地解 以寺中火倉法事書法
寺中入事
- 一 院法圖之寫真法事 以寺中入事 以寺中法事

依信殿中宮御事

在信殿にありて御事 以起首に記し置奉り候
御事御事

去程に君回水者流の事後國名記あり候て左
右に信殿御事候と記し置奉り候九月十九日御事
の御事御事ありて御事候の御事ありて御事
事あり候御事ありて御事候の御事ありて御事
方より山と申すに御事候御事ありて御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事
御事ありて御事候の御事ありて御事候の御事

文伯人と致してはるるを自ら我が人
自書一法生の命の書んともなりし平野勘兵衛
と云ふはさうであらう。又た法生十平の書は
あるありき。いはしは平野勘兵衛の書
ともなはる。法生の書は一法生といふ
は法生といふ。法生の書は一法生といふ
法生の書は一法生の書といふ。法生の書
は法生の書といふ。法生の書は一法生
といふ。法生の書は一法生の書といふ。
法生の書は一法生の書といふ。法生の
書は一法生の書といふ。法生の書は一
法生の書といふ。法生の書は一法生
の書といふ。法生の書は一法生の書
といふ。法生の書は一法生の書といふ。

心方を教へてはるるを自ら我が人
あつたはる。法生の書は一法生の書
といふ。法生の書は一法生の書といふ。
法生の書は一法生の書といふ。法生
の書は一法生の書といふ。法生の書
は一法生の書といふ。法生の書は一
法生の書といふ。法生の書は一法生
の書といふ。法生の書は一法生の書
といふ。法生の書は一法生の書といふ。
法生の書は一法生の書といふ。法生
の書は一法生の書といふ。法生の書
は一法生の書といふ。法生の書は一
法生の書といふ。法生の書は一法生
の書といふ。法生の書は一法生の書
といふ。法生の書は一法生の書といふ。

神あり産す船より色どんてまゝや船の者
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

りれんちをよとゆへに一舟は船の主人からあつた
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
おし船を因らうけてあまあまうらうたおしと着た
右舟うたの舟まうしてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

寛文十三年の春、大坂の陣が終つた。大坂の陣は、徳川幕府と豊前藩との戦いである。徳川幕府は、豊前藩を打ち破り、大坂を占領した。この戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。大坂の陣の戦いには、徳川幕府の将軍、徳川吉宗が率いる幕府軍と、豊前藩の藩主、細川忠興が率いる藩軍とが対峙した。幕府軍は、豊前藩軍を打ち破り、大坂を占領した。この戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。大坂の陣の戦いには、徳川幕府の将軍、徳川吉宗が率いる幕府軍と、豊前藩の藩主、細川忠興が率いる藩軍とが対峙した。幕府軍は、豊前藩軍を打ち破り、大坂を占領した。この戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。

大坂の陣の戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。大坂の陣の戦いには、徳川幕府の将軍、徳川吉宗が率いる幕府軍と、豊前藩の藩主、細川忠興が率いる藩軍とが対峙した。幕府軍は、豊前藩軍を打ち破り、大坂を占領した。この戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。大坂の陣の戦いには、徳川幕府の将軍、徳川吉宗が率いる幕府軍と、豊前藩の藩主、細川忠興が率いる藩軍とが対峙した。幕府軍は、豊前藩軍を打ち破り、大坂を占領した。この戦いは、徳川幕府の権威を確立する契機となった。

成し事とて今約九月廿五日の夜一巨月を映し
娘侍の寄り家婦の口留申し申別日此侍の言
前出て事し候とてなる海と十里申しと見えし
の老女故らるる事し申し候とて言ふ事
あり候とて申し候とて言ふ事し候とて言ふ事
とて言ふ事し候とて言ふ事し候とて言ふ事
とて言ふ事し候とて言ふ事し候とて言ふ事
とて言ふ事し候とて言ふ事し候とて言ふ事
とて言ふ事し候とて言ふ事し候とて言ふ事

是日申す言の如く伯耆伯父智入の事
おの事し候とて言ふ事し候とて言ふ事

おの事し候とて言ふ事し候とて言ふ事
り申す言の如く伯耆伯父智入の事
魚は物とて言ふ事し候とて言ふ事
海は物とて言ふ事し候とて言ふ事
中候とて言ふ事し候とて言ふ事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
おの事し候とて言ふ事し候とて言ふ事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
申す言の如く伯耆伯父智入の事
申す言の如く伯耆伯父智入の事

是と云ふは其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし

信に於ては其の意にあらざるべし

是と云ふは其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし

是と云ふは其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし
信に於ては其の意にあらざるべし

沙耆郎下し一室多ありて能く中納言を以て
色利輝えとの竹名を吉川若人といひ入る如く
亦つ我の沙耆郎傳を長政公の沙耆郎傳といふ
少事ありてとて事なる中納言の如くありて
と長政公の傳を長政公の沙耆郎傳といふ
つとてとていふも傳をかりたれども沙耆郎傳を
言はる後郎く沙耆郎傳といふは沙耆郎傳といふ
言はるは沙耆郎傳といふは沙耆郎傳といふ
同の如かりし事も也

此間書ハ首

龍光院殿如水田清大居士公豊文後列大御陣之時
田代彦助入道水也ト言人輕士、身十カラ御近習
ニ在テ前當後ノ次第ヲ能見聞ニ常ニハ是ヲ語リ
慰ニ此人年老給イ既ニ六十餘リニ成ヌ或夜吾彼
老人ト冬奪ニ昔物語ト有ニ所ニ我老人ト言ケ
ルハ今宵ハ人多カラヌ一兩輩、冬奪最心靜也
願ハ老人

如水田清大居士公、性昔豊別御發向大友義
統御退治ノ事委細ニ語り給ハ終夜是ヲ兼

愚カ若輩ノ後學ニモト請フ老人ノ曰善哉問事
吾年已八十餘リ精根衰（物覺ナリ）然レ其ノ願
吾居士ノ御也習ニ有テ彼列ノ御歿向義統御
退治ノ御莫クニ見タリト事ナレバ我カ見聞ノ
所ヨリ語テヤカセ可申トテ終夜物語有吊レ此物
語ヲ聞ク其言語分明ニシテ誠ニ
鳳清大居士ノ御師タキ、次第御智謀ノ御事
後輩ノ助成ス（イ）莫カト思テ此老人ノ物語ヲ
書留テ彼翁ヲ請テ此草葉ヲ見スレ老人曰我先

賢ニ是ヲ談ス其時日人各其趣キ語ニ違事ナレ
然レ其草葉ヲ一覽シテ取思ハ有斯ク書留テ
置給ハ、他見ナキ隱書タリト言若終ハ外見
有（レ）我其時節猶輕士トシテ教ニ有又身也今
時已ニ抑後リ世ノ風俗ノ体若屋上下禮重然レ
我實名之間ノ衰ニ歎候事後輩之信ヤカレ家
也願ハ我名ヲ除キ其餘託可置
如水公 内府公ノ侍大小上下其教ノ不知西回御
陣ノ間其人ト命ニ給イ其傳高名多ク吾甚

場、不合有在合ト言テ愚者ノ身ナレバ他事
ヲ不覚唯我カニ見聞處ト已レカ身ノ上ニ有
事ノノミ覺信之語ル他ノ事ナク吾全ク信
急ト言テ自偏碎有似タリ是後人ノ嘲嘆ト成
處也必ス吾名ヲ除ケヨト言リ老翁ノ言謀最
然也レカレバ予レ此物語ヲ書田親戚志士ノ後學
ニス全ク他見ノ名ニ非老人ノ自ら成レ業ヲ記
置此間書ノ支證トス此莫ク詳セヨ謂キ又日
富来ノ兵軍ノ事村上長助入道清定是モ其原

居士ノ御舟キ、有テ薩列ノ舟ヲ取レ其士也是
信テ海上ノ軍之次第而リ、見タリ今數イ願
ハ不餘リニ成ヌ然レ其覺知分明ニテ往昔ノ語
ルニ最顯然也仍清定ヲ請ヒテ舟軍ノ次第尋
問書付侍リ又ニ是辭也、後昔ノ忠ヌ有士ノ
輩ヲ有テ誰カ言ヲ證トシテカ此物語ノ間ニヤ
吾此事ノ思見ニ老ノ語今已レ知也信之其文
章ノ頑成ヲ不恥是記ニ置者也

嘉永二年己酉二月廿一日 隈田經房 画



